

BLOOMING EAST のあしどり

TOPPING EAST は、響きの美しい鮮やかな音粒を東東京エリアに振りまきながら、音楽が街なかでできることを拡張していくプロジェクトを実施しています。

主に隅田川周辺から東側を指す、いわゆる“下町、と呼ばれる地域は、義理人情・粋色気を纏い、長年培ってきた歴史や風情があります。その感覚をいま、アートや音楽と、どう結びつけることができるだろう？ CD を買ったり、ライブに行ったり、歌番組を見たり、カラオケで熱唱することで楽しむことのできる音楽。でも、音楽と人間はもっと多様な関わり方があるのではないだろうか。鑑賞を超えて、より主体的に音と戯れるにはどうしたらよいだろう？

そんなことを、最前線で活躍する音楽家・美術家らとともに、ありとあらゆる人がプロジェクトに参加・参画しながら考えて実践していける場づくりをおこなっていきます。

鮮やかな音粒によって見慣れた公共空間を咲かせてゆく BLOOMING EAST

そのなかのひとつ「東東京総舞台化計画 BLOOMING EAST」は、公共空間における音の展開可能性を探るプロジェクト。

日常の景色のなかに音が差し込まれることで、空間の見え方・過ごし方・体験が変わる。そんな状況が生まれることを目指し、2015 年からスタートしました。音や声を広く放ち、それらがふと耳に入ること、日常の場の体感温度や密度を少しだけ上げることができるかもしれません。このプロジェクトに参加する多様なメンバーひとりひとりの視点や経験をもとに、その手法を検討することから始めています。

2016 年度は音楽家・コトリングとともに、ささやかなアイデアから、実現できなそうなアイデアまで、色々な意見を出し合いながら、公共空間での音のつくりかた・つかいかたを探ってきました。イベントを最初に設定して準備を進めるのではなく、まずは耳を頼りに音にまつわるリサーチや実験をおこなって、さまざまな可能性のもとに何が生まれるかを考えていく。この「リサーチ型プロジェクト」ということが、BLOOMING EAST を進めて行くうえでのキモでもあります。

隅田川を背骨とした東京の東側で、音楽家・地域の住民・学生たちが協同しながらリサーチ～実験～検証をおこない、種を蒔くように水をやるように、さまざまな場へ「音の花」を咲かせていくプロジェクト。それが BLOOMING EAST です。

1 BLOOMING EAST のそもそも

そもそもなぜ BLOOMING EAST は始まったのでしょうか？

どんな「コト」を起こしたくて、何を目指すのか？ まずはそこからスタートします。

トッピングイースト理事長の清宮陵一に聞きました。

はじめに

まず、僕（清宮）自身は普段はいわゆる音楽産業の仕事をしています。そのなかで、CD を 3,000 円で買うことや、ライブを 3,500 円で見に行くことだけではない、音楽のあり方を考えるようになりました。地元が東東京ということもあり、地元で小さな投げ銭ライブをやったり、音をテーマにしたほかのアートプロジェクトに関わったりするようになり、そこで、音楽でお金を回すことが一番の目的ではないというあり方に可能性を感じるようになりました。

トッピングイーストは、子ども向けの「ほくさい音楽博」、アーティスト・和田永による「和田永 エレクトロニコス・ファンタスティコス!」、それから「BLOOMING EAST」、この 3 本柱で進んでいます。あえて 3 つのプロジェクトをやることで、中心点をつくるのではなく、バラバラな 3 つがそれぞれ違う方向に進み、活動領域が広がって行く。そんな風になるとよいと考えています。

リサーチプロジェクト

BLOOMING EAST（以下、ブルーミング）は 2015 年度からのプロジェクトです。

まずプロジェクトを始めるうえで、そもそも東東京には「場所」がない、という問題がありました。劇場やライブハウスなど、発表できるところが都心に比べてあまりないのです。

そこで、まずは色々な「場所」を探しました。図書館や公共施設などを洗い出し、エクセルにリストアップす

る。ライブやコンサートをするときは、どこにどんなハコがあって、キャパシティはどれくらいで、どのくらいの値段で借りられるのかを調べます。その普通のことを、当たり前のようにやるのがまずは大事だと思いました。

最初は、地域の見方を編集しないことから始めたいと考えていました。場所を選ぼうと思ったら、いくらでも切り口もあるし、どんな選び方もできる。さまざまな選択肢があることが理想でした。じっくり取り込むことは、全てを把握することだと思ったんです。全部知っておかないと次のアクションができないのでは、という考えもありました。

けれど、施設の名前や住所だけ調べるにしてもおびただしい量があります。それを生かす、とか、そこから何かを導きだすのは大変だし、非常に困難だと感じました。

並行して、編集視点をもったリサーチツアーも実施しました。2015 年度はまず墨田区をいろんな視点からリサーチをしようと、「隅田川」「防災」「空地」などをテーマにおこないました。「探す」という行為を起点として、誰でもが関われるようになってほしいと思ったんです。リサーチをみんなで始めることから、ブルーミングをスタートさせる。それが、このプロジェクトへの関わり方として、ひとつの大きな入口になるのではないかと思います。

しかし、立ち上げ方や PR の仕方など色々課題があり、ほとんど人が来なかった。リサーチメンバーは数人でした。「東東京」「すみだ」などのワードだけではなかなか人は来なかったんです。もちろん、リサーチをしたいという人は一定数いるのですが……。一方で、同時期に和田永のプロジェクトをやり、やっぱり作家には求心力があるんだということも実感しました。

イベントを目標にすること

そんな流れで数人でリサーチを始めたところ、たまたま八広・東墨田という地域に出会います。皮革・油脂・プラスチック・金属などを扱う工業地域で、清掃工場・リサイクル施設・廃棄処分場も日々稼働するエリアです。2015 年度は、リサーチをしてイベントをすることはもと決めていたので、その地域でライブ・ワークショップ

ブ・シンポジウムなど複合的なイベントをおこなうことにしました。自分がもともとイベント屋さんなので、リサーチのアウトプットとしてはイベントの他にイメージがありませんでした。

イベント自体はどの演目もとても素晴らしかったです。街のハブ的なカフェから始まり、公共施設を経て、最後に使われていない廃工場での寺尾紗穂さんのライブ。その土地に根ざした場所を多面的に使っていくことができ、とても成果がありました。

一方で、いくつかの問題点もありました。イベントに対する熱ばかりを追いかけてしまったり、人の関わり方を十人十色にすることで自らがコンサルタントのような役割になってしまったり。参加者はリサーチからイベントまで関わってくれて、「すごくよかった」と言ってくれましたが、この形式をずっと続けていくのは難しいとも感じました。

たいがい、イベントは閉じられた空間でおこなわれます。でも、ブルーミングを始める際に考えていたのは、もっと広く不特定で、誰もが、意図的でなくても音に接してしまう、そんなイメージでした。そういう意味では、2015年度のイベントは、意思や意図を持ちすぎていました。そこを目指すのは、ブルーミングでやるものではないのかもしれないと、一回本気でイベントをやってみたからこそ改めて気づきがありました。

イベントのノウハウや経験は自分たちにすでにありますし、テンションをあげて集中して、みんなで一直線に本番に向かっていくぞ！ というかたちだけが場をつくることの“解、というわけでもないとも考えるようになりました。

2016年度のBLOOMING EAST

そこで、イベントを目的にプロジェクトを進めるのは一回やめてみることにしました。より広く、色々な人にリーチする可能性のあるプロジェクトにするため、2016年度は大きく舵を切りました。

もうひとつ大事なことは、音楽家にとって、ステージの上でスピーカーから聞かせるのではない、既存の場所からの抜け出し方、新しい聴衆との出会い方を模索して、実践できたら面白いんじゃないかということ。それは、

音楽家にとってもそうですし、このプログラムに参加している参加メンバーにとっても、ここが実験と実践の場であってほしいと思い、今年度のBLOOMING EASTを日々進めています。(談)

2 KICK OFF

とっかかりを探す

2016年9月9日、墨田区にあるトッピングイースト拠点。この日集まったのは、音楽家・コトリングをはじめ、トッピングイースト事務局、運営スタッフ、日本大学理工学部建築学科の佐藤慎也とその研究室の学生たちです。総勢約30人。2016年度のBLOOMING EASTがスタートしました。学生たちの専攻は建築。音楽に関しては、まったく専門ではありません。そんなみんなで、音に関するリサーチを始めるといっても、何をとっかかりに始めたらよいでしょうか？ まずは音楽家・コトリングの興味のあること、音について普段感じていることを聞くことから始めました。

最初は場所について。以前、石の採掘場でライブをおこなったというコトリング。そこは音がほどよく吸われ、ほどよく跳ね返り、気持ちよく響くそうです。洞窟のような場所や、湿気のない場所がそのような音がするのでしょうか。“響き”について考えるのは一つのポイントになりそうです。

話は変わり、コトリングという名前にもあるように、とにかく「鳥」が気になるとのこと。鳥と音で会話をしたい、というシンプルな欲求から、音を使って何かできないかというアイデアが出ました。鳥の鳴き声を採譜して、ピアノで弾くと鳥と会話できないか？ そんなことが可能なのは誰にも分かりませんが、本当にできたらすごいです。

人に対する音。人にとっての音。

鳥に対してのアイデアが出ましたが、では、人に対して何かをやるとなったときに、人はどんな音に気がつくのでしょうか。気がついたり感じたりしつつも、気持ちいいと感じるものはどんなものなのでしょうか。“ほどよく人に届く”音や音楽はどういったものなのでしょうか。

響きに関しても、演奏者にとって気持ちのよいところと、お客さんの気持ちよいところの差があるかもしれません。「外（野外）の色んな雑音が相乗効果をもたらす

ものもあります」とコトリング。電車の通る高架下でライブをしたときは、低音と、列車の遠ざかっていく音が混ざっていてよかったと言います。

ここでまた問いが生まれます。数学的な数値ではなく、個々人の気持ちよさの感覚に基づいて、何かつくることは可能だろうか？ 個人の感覚の「音」を言葉にできるのか？ さらには、その“気持ちよさ”のバリエーションを集めることは、リサーチの一つの手法に成りうるのでしょうか。

リサーチの進め方

さまざまなアイデアや考えがめぐりましたが、リサーチの進め方を決めなければなりません。いくつかお題を持ってリサーチする。色んな可能性を持っておく。いくつもある候補を、何をもちえて選んでいくべきでしょうか。そしてたくさんの場所にその都度、足を運べるかも問題になりました。

この日は、リサーチ自体の手法をもう少し探った方がいいのではないか、と意見がまとまりました。リサーチ自体のさまざまなバリエーションを考える。つまり、「音のリサーチ」にはどんなやり方があるか、そこから探ってみることにしました。まずは、都内で自分が気になった音を自由に録ってくることから始めます。携帯電話の録音機能でよいので、それぞれが音を録ってきて、次回に持ち寄ることに決めました。

3 RESEARCH：採集①

都内の音を採集する

2016年10月1日 MESSAGE

データをまとめました。まずは、ダウンロード願います。環境を揃えるため、すべて mp3 に変換してあります。誰のものか、どこか分からないように、すべて番号のファイル名となっています。全部で 58 ファイル。がんばって聞いて、選んでください！ このリサーチ、すごくおもしろいかも。録音している人の声が入っていたり、そこは東東京なのかという場所だったり、それは明らかに南の島だろうという場所だったり。

どうやって選ぶのかがまったく謎ですが、最初のアプローチとしてはおもしろいと思います。よろしく！

リサーチ第1弾は、学生たちが街なかの気になる音を録音してきて、データを集めました。それをランダムに並べて全部聞いてみます。聞いてみて気になった音、好きだった音、何だかひっかかった音を選び、得票数の高かった音源の、実際に録音した場所に足を運んでみることにしました。

響きのある音、変化のある音、が、気になる音？

2016年10月11日。秋晴れの気持ちのいい日。まずは一番票が集まった、六本木のミッドタウンへ向かいます。天井が低い地下通路を抜けると、室内広場のような空間が。ミッドタウンの案内カウンターなどがあり、大きな彫刻のオブジェが置かれています。音源の採集者いわく、地下通路からその空間に入ったときに、音の響きが変わったのに気がついて録音ボタンを押したとのこと。たしかに、天井が高く音がよく反響しています。コンサートホールの原理に近いのか、地下通路から広い空間に抜けたときに音もふっと広がって、何だか気持ちのよい感覚がするようです。みんなこの「音の響き」を頼りに選んだのでしょうか。

つづいて向かったのは、墨田区にある高校裏の道路。何てことのない普通の道ですが、少しだけ「ガシャン、ガシャン」と一定のリズムが聞こえます。覗いてみると、小さい印刷屋さんがありました。採集者が街なかを散歩しているとき、印刷機が一定で動く音が、車や人通りの音に混じって聞こえて来て、録音ボタンを押したのだとか。この音源を選んだ人も、そのかすかな「ガシャン、ガシャン」に反応したようです。ミッドタウンでは音の反響や響きに引っかかっていましたが、ここでは「変化のある音」を頼りに選んだようです。

最後は、浅草から川を挟んですぐの隅田公園へ。ここでは、鳥の音。それから、高速道路を走る車の音。採集者は、キックオフでの話から、鳥の声がしたところで録音したそう。ただ、音源で聞いていたときに持ったイメージと、実際の場所を見たときのギャップがなかなか違うことに驚きました。隅田公園は広くて気持ちがいいですが、閑散としていても寂しさが漂います。みんなが想像していた、都会のなかの緑溢れる爽やかな公園のようなイメージとはだいぶ違っていました。どうやら、いい音のところがいい風景ということでもないようです。

東京の音を平面的に探る

採集された音源を並べてみて分かったのは、普段聞き慣れている環境の音、ありふれた音はあまり録られなかったということです。沢山の音源が並んだときに、特徴的な音がないので自分が録音したものがどれだか分からない人もいました。どこかに少し特徴があったり、移動している最中にふっと周りの音の聞こえ方や響きが変わったり、聞き慣れない音が差し込まれたりする瞬間に、録音のボタンを押していることが多かったようです。

また、音源を羅列して聞いて選んでいる際も、知らず知らずのうちに、とっかかりや印象に残る音を探して拾っているのかもしれませんが。やはり街なか（とくに都内）の環境音というのは似通っており、その場所固有の音というのもあまりないようで、だからこそ細かい差を探し、とっかかりを探して聞いているのかもしれませんが。

ここで、次のリサーチに向けて仮説を立ててみました。東京の公共空間の音はだいたい似通っているので、都内の音を平面的に探しても仕方ないかもしれない。

では、高いところの音は、違うのではないか？

音が響くことに頼らず、そこの現実音にも左右されない、ということを考えて、上空の音を考えることは新しいアプローチかもしれません。音の上下運動を探ってみる。ただし、その結果に何が聞こえるかは分かりません。

4 RESEARCH：採集②

高い音を探る

2016年10月18日 MESSAGE

東東京の高い音を録音して来てください。

実際に高い場所の音。凧につけられた高い位置の音。高い位置から低い位置へ高さが変化する間の音。風の音に邪魔されない高い音。

高い音というのは、周囲で発生する環境音から、できるだけ遠ざかった場で聞こえるものが何か、ということを考えてみたらよいと思ったからです。コトリンゴさんの音が、その場にある音とどのように混ざるか、という視点ではないところで何が考えられるかをもう少し探りたい。

その視点があれば、何も高い音でなくてもよいのですが、みんなの持って来た音を聞きながら、そんなことについて話ができればと思います。

現実音や周囲の音に関係なく、別の音が聞こえて来ないか？ という考えのもと、今度は都内の高低差のあるところの音を探してくるようになりました。しかしこれがなかなか大変。都内の高いところといってもあまり思いつきません。

とりあえず、それぞれの思う高いところの音を録ってきました。東京駅・KITTEの屋上。六本木・地上53階の森美術館（室内）。高低差という観点から、階段の上から走って降りてくる音、下から登ってくる音をとる人、凧に携帯をくくり付けて飛ばしてみる人も（しかしうまく飛ばず、落下）。みんなの試行錯誤がうかがえます。

録音された音たちを聞くと……とにかく、風の音、ガサガザとしたノイズが主でした。採集①に比べて、音が遠くなった印象はありますが、別の音が聞こえてくるわけではありません。

そもそも高低差を感じるといっても、都内で上下運動ができて、その差が歴然と分かる場所というのも、なかなかないようです。期待していたような劇的な違いはなく、肩すかしをくらう一同でした。

高い場所はあまり音がしない、という結果に終わった採集②。次の一手をどうしようかと頭を悩ませます。そもそも、高い音というお題は、音を「加える」話にならないようにするためでした。採集①では、結果的に音の響きのよい場所が見つげ出されましたが、そういう場所をただ見つけて、そこに何か音を置いてみるというだけでは、つまらないと考えたからです。「高さ」というキーワードから、音を少なくすることについて考えることができないでしょうか。公共空間において、音を足すのではなく、減らすこと。それってどういうことでしょうか。

ところで、このプロジェクトはリサーチ型というのがキモです。いろんな悩みや可能性に出会った際は、色々なアプローチでこねくり回してみることも必要かもしれません。最初の2回は、録音という方法をとっていましたが、それを変えてみることで何か見えてくるかもしれません。ここで、録音してくるだけでは受け身なのではないか？ という新たな考えが浮上します。受け身じゃない音との付き合い方って何だろう。録音以外の方法で音を採取することは可能なのだろうか。たとえば、音を可視化してみるにはどのようなやり方があるのだろうか。一回大きく横道にそれて、録音以外のリサーチ方法を考えてみます。

録音以外の方法を探る

2016年10月25日 MESSAGE

公共音で好きな音と嫌いな音を録音以外の方法で採取してきてください。録音以外であれば、音が鳴ってもよいし、鳴らなくてもよいです。発声してもいいし、ジェスチャーでも、立体物でも何でもよいです。自由研究のような感覚で楽しくやってみてください！ それぞれその音を再現できるように考えてきてください。

2016年11月6日。一般公募して集まったメンバー数名も新たに加わり、全体ミーティングがおこなわれました。高い所の音を検証した結果、録音してくるだけでは受け身なのではという仮説が出てきました。受け身じゃない音との付き合い方や音を「減らす」ことを考えるため、録音以外の方法で音を採取し、発表しました。

普段聞いている何気ない音を身近にあるものでやってみる人。電車の音をペットボトルのフタ、鳥の泣き声は瓶をこする音、風の音を葉っぱがすり合わせる音で再現。ある人は、踏切の音を一度録音し、チューナーを使って五線譜に書いてみました。聞こえた音を、オノマトペ（擬音・擬声）を使って再現する人。なかには、そよ風の音を匂いで再現しようとした人も。果物と葉っぱなどを使って一緒に嗅ぐことで、そよ風の音のイメージにリンクする……かも。果たして音の再現になっているのかは不明ですが、何となくそよ風の音分かる、という人もいました（もちろん全く分からない人も）。

作曲行為、とは何か？

ここまで、録音という方法で音を探っていましたが、その方法をいったん捨てたというのが今回のポイントです。「録音以外の方法で」というお題は、思わぬ再現方法を生みました。しかも、どれも目をつぶって聞いたり、嗅いだりすると、イメージがふくらむようです。でもこ

れて、一体、何なのでしょう。トッピングイーストの清宮からは、「録音したものをそのまま流すのではなく、採取して再現するというのは、ある種の作曲行為ではないか」という意見が出ました。いわゆる五線譜や12音階を使った作曲ではないけれど、新しい作曲手法を探しているのではないかと。そして、バリバリ作曲するコトリングの持つ方法論をちりばめながら、みんなに作曲行為をふりわけていくことができないか……。

作曲という言葉でイメージするのは、旋律や和音をつくったり、それを楽譜や楽器に落とし込んだりすることだと普通は思いますが、もしかしたら、そうじゃないことでも「作曲」と呼べるような作業になりうるのかもしれない。それはつまり、音楽の教育や方法論を知らない人たちが、曲を聞いたりライブを楽しんだりする（享受する）以外の行為——自分たちで音楽のようなものを作る（生み出す）行為に繋がる可能性があるということです。

映像に音をつける

このころ、コトリングが音楽を担当したアニメーション映画がちょうど公開されました（片渕須直監督「この世界の片隅に」）。音のない映像だけを観て、音楽をつくったといいます。音楽だけを入れた（音効がまだ入っていない）映像を見たところ、生活音がなく、何だか不思議で違和感を感じたのだとか。このエピソードをもとに、風景を映像（視覚）として動画にとって、音を足す実験はできないかというアイデアが生まれました。

ここまでのリサーチで、気にすべきことはふたつありました。まず、録音をしたりさまざまな方法で音を再現したりしてきた結果、「視覚」という観点が大幅に抜け落ちていたこと。聴覚や嗅覚を手がかりにしていたのは面白かったのですが、リサーチのプロセスを経て、視覚的な要素が抜けていってしまいました。けれど、実際に何かを公共空間でおこなう際には、見るもの・見えるものはきっと重要なはず。もうひとつは、リサーチの方法を探るあまり、BLOOMING EAST のそもそものベースである「東東京」の要素がほとんどなくなっていたことです。東東京に音を振りまくプロジェクトのはずが、東東京らしさや地域性が置き去りにされていました。

先ほどの映像に対するエピソードを手がかりに、そして「視覚」「東東京らしさ」を取り戻すために、映像を使って音の実験をしてみることにします。映像はコトリングが東東京のさまざまな場所をめぐって撮影してくることに。普段、作曲や演奏をしているコトリングが、やったことのない映像制作をおこない、メンバーはまたまたやったことのない作曲や音効行為をやってみます。それぞれが普段やっている役割を手放し、違うことをやってみることで、面白い化学反応ができればという期待がありました。

「コトリング監督の映像に対して、音もしくは音らしきものを表現する」というお題。音をつけるうえでのとっかかりは、どこで自分の温度が上がるのか、ということ。どんなとき、何を観て、音をつけてみようと思うのか。それを見つけることは、今後、公共空間において音を使う場の体感温度を上げようとしたとき、その「上がる」というポイントや境界線を探ることに繋がるはず。映像に対して音をつけることは、現実じゃないものをつくっていく行為と言えるかもしれません。この作業を経たのち、最終的には現実を考える行為に繋がるように。少しずつですが見通しが立ってきました。

はじめての作曲

2017年1月4日 MESSAGE

明けましておめでとうございます。年末に無茶苦茶なお願いをしましたが、映像は無事にダウンロードできていますでしょうか？

9日のミーティングのときに、みんながつけた音をコトリングさんとともに聞きたいと思います。事前に録音してもよいし、その場で何かを使って音を出すパフォーマンスでもよいです。

今回はひとりずつ音を考えてみてください。映像にピッタリと合わせた音を考えてもいいし、ワザと映像とズラした音でもいいし。効果音や、現実音や、声や、音楽や、聞くことができれば何でもよいです。

もともと、コトリングさんがアニメの音楽を担当したときの、音のない世界に音を付け足すという作業の不思議さを体験したことから、今回の企画は始まっています。

また、コトリングさんが撮影した映像は、東東京らしさを表すものとなっているはずですよ。

みんなも映画のサウンドトラックを作曲するような、そこに声を当てる声優のような、効果音をつける音効のような、そんな気分で楽しく作業してみてください。

「東東京らしさ」と「視覚」を少しだけ見失っていたBLOOMING EAST。コトリング撮影の映像にメンバーが自由に音をつけてみる実験をおこなうことにしました。映像撮影は浅草雷門・仲見世通りから始まり、隅田川を渡って隅田公園、曳舟のキラキラ橋商店街、墨田清掃工場、東墨田会館、また隅田川近くへ戻り白鬚団地へと。いくつものピースを素材に、コトリングが「動きのあるものを中心に編集してみた」という6種類の映像です。そのなかから好きなものを選び、音をつけてきました。ちなみに、メンバーに渡した映像は、もとの音をあえてカットしました。音がない映像に、各々が想像して音をつける試みです。

知らないことから

映像に合わせてオノマトペをつけた人。コーヒー豆の映像を、小豆とお米で音を再現した人。フリー音源でバックミュージックをつけた人。映像のモノの動きに合わせてオカリナで音をつけた人。鳩の足の動きに合わせて木琴の音を鳴らした人。近所の公園に録音に行ってその音をつけた人。映像のなかでの会話を想像してセリフをつけた人。自分がおせんべいを食べる音を録ってつけた人。現実の場所と同じ音を録って、ギター之音とミックスした人。地下街にもぐる動きをダイビングのイメージに見立てて、水のなかに潜る音をつけた人……。

とにかく十人十色な音のつけ方が現れました。ここでポイントなのは、ほとんどの人が、音楽をやったことがないということ。いわゆる「作曲」をしたことがある人はほぼいません。それでも、スマートフォンやパソコンの機能を使ったり、自分で音を鳴らしてみたりすることで、映像に音がくっつきました。

コトリング曰く、ふつうは映像に音をつけるときは曲だけを合わせると違和感があるそうです。音効を同時に進行することでブレンドされていくそうなのですが、そんな技術がないメンバーたちはそんなこと全く知りません。なので、とにかく既存のフリー音楽を、大音量で物怖じせずつけたり、スマホで録音したときの周囲のノイズが入って、偶然にも音楽とブレンドされたりと、プロが絶対にやらないような音のつけ方が続出しました。

現場へ戻る

一方で、やはり音楽の初心者には、できないことも沢山あったようです。色んな楽器を使って音色を豊かにしたかったけれど、楽器を持っていないし、扱える技術もない。フリーソフトを使ってみたけれど、音声が3つまでしか重ならない。思った通りに機械が動かせない。自分がイメージしていたものと、実際やってみた感じが全然違う。

今回の実験は、とにかく自分ができる範囲のものでやってみる、という試みだったようです。と言いつつも、スマートフォンや無料のアプリ、無料の素材が簡単に手に入ることから、音楽をやったことのない人たちでも、

やろうと思ったら何となく音をつけられる、ということも分かりました。

さて、ではこれまでの採集や実験をふまえ、何かをつくろうと思ったときに、どういうことができるでしょうか？ 改めて BLOOMING EAST の主旨に立ち返ってみると、どこかの公共空間や日常の場所で、音によって気持ちがふっと上がる何かをつくる、というのが目的です。初めの「採集」以降、室内でみんなで話し合い、実験してみることが多かったのですが、ここで今一度、現場一つつまり外に出てアプローチをおこなうのはどうかと考えました。映像で登場した「鳩」や「地下街」を実際に見に行ってみることに。画面のなかでしか見たことのなかったイメージと、現実にその場で得る視覚的な情報や温度や音。映像と現実はどうなふうにギャップがあって、現実に対してどんなふうに音が使えるでしょうか。実際に身体で確かめに行ってみます。

7 RESEARCH：実地見学

現実の場所を探る

2017年2月8日。冬晴れの日。空気は冷たく澄んでいます。

映像のイメージを抜けて、現実の場所へ音を差し込むためのステップとして、実際の場所を再度リサーチすることにしました。まずは、多くのメンバーが音をつけていた地下街へ。銀座線浅草駅に隣接する「浅草地下街」。約50年前に開通した、戦後の東京の地下街ではもっとも古い場所だそう。人通りの多い浅草の地上から、細く急な階段を下ります。独特の匂いと湿気。白い蛍光灯のあかり。閉塞感。天井には配管や電気線がむき出しで通っており、雨漏り対策用にビニールとチューブが張り巡らされています。飲み屋、整体、空き店舗、寿司屋、床屋、占い、シャッター、ビデオショップ、その先には銀座線の改札が直結。どの店も入り口の扉が低く、ちらっと居酒屋のなかを覗くと、昼の1時にすでに飲んでいる人が……。

メンバーの1人が音をつけていたダイビングのイメージを試すため、水のなかの音を鳴らしてみること。しかし、映像で見るよりも現実の視覚情報や周囲の音、雰囲気や匂いが印象強く、鳴らしている音が効果的かはイマイチ分かりません。映像ではもとの音を切っていたので全く知りませんでした。電車の改札の音、人の足音、ビデオ屋から鳴る音楽、それから排気管や電気盤のような音などが聞こえます。色々な音と、明かりや匂い、それからお店の佇まいや文字情報が入り交じって、独特の雰囲気を生んでいました。

ここで音を鳴らしたり、ライブをしたりするのはどうなのか？ みんな頭を悩ませました。

鳩を探しに

地上に戻り、仲見世通りを歩いて浅草寺へと向かいます。お目当ては、映像にピックアップされていた鳩。浅草寺の境内には、鳩が沢山歩き回っていました。平日にも関わらず沢山の観光客で溢れた浅草寺は、遠くから聞

こえる車の音と、人の足音、それからとにかく人の声。仲見世通りのお店から聞こえてくる音。そのなかで鳩は無言で歩き回っています。たまに飛び立つ羽の音。鳩の足音は、小さすぎるのか聞こえません。映像で、木琴の音をつけられた鳩は何だか可愛らしく見えたが、現実の鳩は、とにかく普通の鳩でした。

次なる鳩は、隅田川を渡り隅田公園。採集①の際にも訪れましたが、やはり、浅草の人ごみに比べ閑散としています。高速道路を走る車の音、それから鳥の鳴き声。砂を踏む足音。公園には、新聞を読むおじさん、散歩しているおじさん、ベンチで寝ているおじさん、鳥をカメラで撮影するおじさん。日がぼかぼかと差し込む先にはカモの集団。池には、サギとカワセミを見つけました。近くにいたカメラを構えたおじさんに話を聞くと、隅田公園にはカワセミが1羽しかいないそうで、おじさんたちはそいつの写真を狙っているんだそうです。

現実に音を振りまくには

現実の場所を見学した一行。とにかく、映像は現実を切り取ったごく一部の限られた情報なんだと、当たり前のことですが改めて認識しました。映像に音をつける際は、尺も見える範囲も決まっているので、音をつけるにも頼りにする枠組みがありますが、現実の場合はそうはいきません。街なかで音を聞きながら歩くような体験は、歩く速度や動きは人それぞれですから、全てを予測して音をつけることはできません。そんな予測不可能なことに対して、どんな音をつくったら面白いでしょうか？

実際に場所を見てみて、さまざまなアイディアが出ました。歩いている人に合わせて、直接その場で音を出す？ 壁や道ばたに、オノマトペを貼る？ 音源を iPod や携帯に入れて、イヤホンで聞きながら歩く？ お店のスピーカーを借りて流してもらう？ 現実の風景に、どんな角度で、どんな音があったら、人は嬉しくなったり面白くなったり、しみりしたりするでしょうか。

実際に見た結果を頼りに、音をつくってみることにします。

8 OPEN CAMPUS

プロセスを公開する

実地見学を終えた時点で、すでに 2017 年の 2 月。年度で進む BLOOMING EAST は、ここで、中間発表をおこなうことにしました。

「リサーチ型プロジェクト」として始まったこのプロジェクト。リサーチ自体は地味で、ときにバカバカしいですが、音のつくりかた・つかいかたを考えるメンバーは大まじめに取り組んできました。けれども、やっぱり関わっている本人たち以外には分かりづらく、外の人たちからしたら「何をやっているんだ？」と思われがちです。

このリサーチ期間は、これから先、東東京のさまざまな場所に音の花を咲かせるにあたって、種を蒔くよりもっと前、畑を耕したり土にどんな肥料がいいか考える時間です。つまり、プロジェクトを進めるうえでどんなアプローチがあって、そもそもどんな進め方があるのかを検討することでもあります。そんな地道なプロセスを、中間発表として公開する。そうすることで、中身の見えにくいプロジェクトをさまざまな人に知ってもらい、またプロジェクトに興味をもち関わってくれる人をふやすことができると考えました。

「オープンキャンパス」とは、文字通り学校施設を公開し、関心のある人に知ってもらうためのイベントです。公開するのは施設だけでなく、授業や学校生活、就職などに関するさまざまな情報も含まれます。BLOOMING EAST は学校ではありませんが、音にまつわるアレコレを試行錯誤しながら考えて、新しい可能性を探るという意味では、発見や出会いの場でもあります。プロジェクトのプロセスを公開し、どんなことをやっているのか知ってもらう、そのための「オープンキャンパス」です。そして、BLOOMING EAST は街を舞台にしたプロジェクト。東東京をキャンパスに見立てて、街も含めて BLOOMING EAST を体験できる機会になればよいと考えました。

「オープンキャンパス」に来た人に、街と音が混ざり合う瞬間も体験してもらいたい。そこで、これまでの音の実験の中間発表も兼ねて、コトリングがプロデュースした「公園と地下街のサウンドトラック」とともに街を散歩できるようにします。実地見学で検証してきた、公園と地下街。それらの場所に音を重ねてみることにしました。さまざまなアイデアがめぐっていましたが、果たしてどんな音や音楽ができたのでしょうか。

ぜひ音を持って街へ出てみてください。ふだん見ている風景、初めて見る風景。周りの音と BLOOMING EASTの音。どんな風に混じり合って、何を感じるのでしょうか。

おわりに

BLOOMING EAST は、ひきつづきプロジェクトを進めていきます。これまでのリサーチを踏まえ、2017 年度はどのような音をつくり、どんなことを起こせるでしょうか。

「東東京と音」が何だか気になる人。街や人やモノに、音でアプローチしてみたい人。隅田川周辺の土地や歴史を見つめてみたい人。東東京の何かに耳を傾けてみたい人。そうでなくても、オープンキャンパスで何か面白いなと思った人。

「音楽」ができてできなくてもかまいません。2016 年度に耕した畑に、これから一緒に種を蒔き水をやり、花を咲かせたい方。よかったら一緒にやりましょう。お待ちしております。

ゲストアーティスト：コトリング（音楽家）

企画：清宮陵一（トッピングイースト理事長）

プロジェクト設計：佐藤慎也（日本大学理工学部建築学科教授）

メンバー：日本大学佐藤慎也研究室（堀切梨奈子、今村文悟、大川碧望、鎌田七海、下村耀子、仲村祥平、江口美樹、大場麻莉子、大庭奈菜恵、中村直、山本美咲、柳スルキ、古賀愛乃、石曾根斐子、大岩郁穂、原碧、藤波友希、守山万由子、矢神千帆）、糸永麻子、亀山遥平、松尾早耶

記録：東彩織

進行：藤井さゆり

事務局：西村幸知（トッピングイースト）

プログラムオフィサー：芦部玲奈、上地里佳（アーツカウンシル東京）

特定非営利活動法人 トッピングイースト

音楽が街なかでできることを拡張していくことを目指し、参加型のプロジェクトを多数展開。音楽家や美術家と協業しながら、響きの美しい鮮やかな音粒を東東京エリアに振りまいていきます。www.toppingeast.com

本事業は「東京アートポイント計画」として実施しています。

主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人トッピングイースト

協力：日本大学佐藤慎也研究室

お問合せ：特定非営利活動法人 トッピングイースト

メール info@toppingeast.com

facebook：https://www.facebook.com/toppingeast/

twitter：https://twitter.com/Topping_EAST

TOPPING
EAST